

寺町散歩（魏魏山光源寺）

史談会幹事 村崎春樹

長崎市の東側風頭の麓に、一列に13の寺院がならでいる。その一番北側の伊良林の大窪山北麓に魏魏山光源寺は有り、南は禅林寺に接し、山門は西を向いている。

長崎市史及び光源寺沿革によれば、光源寺の開基は、肥後柳川瀬高下之庄光源寺の住職であった松吟(しょうぎん)であり、寛永8年(1631)頃、まだキリシタンの勢力が残っている長崎において、浄土真宗の布教をおこなった。この頃の寺院の規模と所在地は不明である。寛永14年(1637)島原の乱が起こると、同年長崎奉行馬場三郎左衛門から銀屋町に寺地を与えられたのを契機として、松吟は肥後柳川の光源寺に戻り同寺を弟に譲り、銀屋町に京都西本願寺の末寺、出身地柳川の寺号光源寺そのままに魏魏山光源寺を建てた。延宝4年(1676)の火災で銀屋町の寺地が類焼した為、光源寺の墓地が有った伊良林の現在地に移った。銀屋町にあった光源寺の位置は、光源寺沿革によれば現在の皓台寺前の天満宮付近としている。天保2年(1831)11月4日本堂より出火、本堂並びに庫裡も焼失、天保4年(1833)本堂再建、同7年庫裡も再建された。明治になり廃仏棄釈の流れの中で光源寺も他の寺院と同様に一時衰退するが、明治16年(1883)には同14年(1881)夏に焼失した鐘樓を再建すると共に、山門も再建した。明治30年代には、歌人齊藤茂吉、若山牧水が同寺を訪れていると光源寺沿革は云う。



光源寺山門

歴代住持は、

開山	松吟	二代	最田
三代	松吟	四代	覚雲
五代	一源	六代	知観
七代	報瓊	八代	執圭
九代	諦順・元隆		
十代	節巖・梅溪		
十一代	道英	十二代	龍英
十三代	二英	十四代	活雷
十五代	聞信	十六代	楠達也(現住持)



産女の幽霊像(光源寺)



幽霊の絵(光源寺) 蔵

例えば、俗に「光源寺の幽霊」像と赤子塚の伝説が有名であるが、それにまつわる伝説は明治時代になってからとも云われる。昭和3年8月発刊の「長崎談叢」に掲載されている「長崎における二三

の怪談」では、全国に同種の怪談があるとして、常陸の頭白山人、宮島光明寺の上達上人、伊予西宇郡龍譚寺の幽霊和尚、陸中稗貫郡大興寺十世如幻充察和尚、摂津有馬郡母子村永澤寺通幻禅師、土佐国浦辺の餅かい幽霊、紀州の子育て幽霊などを紹介している。光源寺の幽霊像には、由緒書



があり、常陸国鳥栖無量寿寺の幽霊であることが判明しているが、この幽霊像が光源寺に伝わった由来は不明である。「光源寺の歴史 産女(うぐめ)の幽

霊」によると、幽霊を納めてある箱の蓋表には産女幽霊、箱の裏には延享五歳舍辰五月下旬第七日とあり幽霊が作られた年を示しているとされている。この幽霊像は、戦後、毎年旧暦7月16日に開帳され餞が、参拝者に配られている。なお、平成13年からは、8月16日に御開帳はかわっている。光源寺の墓地には、長崎最初の唐通事馮六、龜山社中一員であった二宮又兵衛、阿蘭陀通詞横山家などの墓がある。



馮六の墓



長崎奉行稲生七郎右衛門正倫の墓

境内には、大正年間までは光源寺の他に享保2年(1717)に照圓寺、同5年(1720)には玄成寺が末寺として境内に有ったが、照圓寺跡には昭和63年に光源寺門信徒会館が新築され、玄成寺は一部納骨堂として新築されている。又本堂は平成元年に解体修復され、同3年に完成、庫裡も平成9年に新築された。更に、境内には寛文6年(1666)2月17日病歿した長崎奉行稲生七郎右衛門の墓がある。光源寺と云